

「ウィンターは僕の夢」

青年協が新春の集いに突撃

早くもウィンターセミナーの成功を宣言か！



1月24日、日本一の湾岸都市、横浜で行われた神奈川私教連「新春の集い」に青年協として参加し、神奈川青年協議長である寺脇先生が来年のウィンターセミナーにかける思いを熱く語った。中でも「神奈川ウィンターは僕の夢」という真っすぐな言葉はきっと多くの先生の教師としての本能に響いたことだろう。また、寺脇議長を献身的に支える伊佐津先生（青年協常任）は本紙（KWS）を紹介、「若い人にまず外に出て学ぶ楽しさを知ってほしい」と語った。本紙の執筆者としても是非多くの若手の先生方

に読んでほしいと思っている。少しでも身近に感じてもらうために04号「ウィンター外伝」より言葉遣いも変えてみた。

今年の新春の集いには例年よりも多くの先生方が参加された。沢山の若手の姿もあり、青年同士の交流も盛んにおこなわれた。寺脇議長は家庭を守るべく当日は禁酒であったが、それが功を奏したのか、次々とウィンターセミナーの実行委員委に勧誘していた。今回、青年を外に引っ張ってくれた各職場の先輩方には深く感謝したい。やはり、最初の一步を踏み出すには勇気がいる。どんなに大きく強い鳥も初めて自分の巣から出るときは怖いのだ。しかし、ひとたび出れば瞬く間に成長するのをもまた自然の摂理である。今回参加した青年にはぜひ一緒に青年協や実行委員の輪に加わってほしい。

そして、東京から参加してくれた東京青年協の仲間にも感謝したい。神奈川の間人として東京にコンプレックスがないわけではないが、こういったときに駆けつけてくれる江戸っ子の人情と気概は素直に見習いたいと思う。

そんなところで、青年協による新春の集いへの突撃は成功に終わった。

2月6日(木) おみやげ教研

熊本ウィンターセミナーのお土産教研を2月6日（木）私教連本部で行うことになった。おみやげ教研とは、県外の教研に参加できなかった先生方のために、青年協が分科会で発表されたレポートから厳選し、発表してもらう教研である。今回はオンラインも併用で開催するので、サテライト会場をつくって皆で参加して

ほしい。もちろん私教連本部から現地参加も大歓迎！終わった後は交流会をするかも？内容は以下の予定である！

タイムテーブル

18時30分 開始 司会：伊佐津先生
挨拶 青年協議長 寺脇

18時40分 熊本ウィンター感想
ウィンターの概要説明：寺脇
感想まとめ：伊佐津先生、他参加者

19時00分 レポート報告：中橋先生（広島）
報告 20分
質疑 5分

感想交流+ウィンター案の聞き取り(会話の中で聞き取り)30分

19時55分：おみやげ教研まとめ

20時00分 神奈川ウィンター紹介、現状や実行委員の募集

おみやげ教研 兼

ウィンターセミナー実行委員会に

ぜひ参加してください！

「裸足で逃げる」を読んで

熊本ウィンターセミナーの記念講演、藤田先生（大阪緑涼高校）の話の中で、先生がこの「裸足で逃げる」という本をある女子生徒に渡し、返却時に手紙を受け取ったという話があった。女子生徒の手紙には自分とこの本の中に登場する少女たちを重ね、同じこと異なること、そして「先生は何色が好きですか？くすんだ色でも良いですか？」と記してあった。公演の内容や手紙の内容から大方、その女子生徒に何があったのか予想はついていたが、その夜の夕食交流会で藤田先生に直接質問し、さらに詳しく知ることができた。

私は藤田先生がどんな本を渡したのかとても気になったという話を学校の図書館司書の先生にしたところ、その先生はすぐに入荷して、数日後の朝礼前に「中古だけど」と言って渡してくれた。私は嬉しくなり、すぐに読み始めた。これは、後々思ったことだが、司書の先生はこうやって生徒の微かな学びへの興味を見逃さず本を与え導いてきたのだろう。私もいずれ、自分が教える教示型の指導ではなく、生徒自らが学び求めることを促す指導を試みたいものだ。その方がよっぽど効果的で深い学びができるに違いない。何より、あの朝の先生はとても格好よく見えた。

本を読み始め、私は一章も読み終えぬうちに打ちのめされてしまった。予習はした。セミナーから帰ってきて今一度、家庭内DVや性暴力についての統計を調べ、一通り分かった気になり、問題を把握できていたつもりでいた。しかし、この本に書かれていること、著者である上間教授が向き合ってきたリアルな少女たちの人生は「かわいそう」とか「悲しい」などとは似て非なる感情を私の胸に抱かせ心を締め付けた。あえて言葉にするなら、「もどかしさ」「ああ…、もう、どうして…」といった感情である。本の帯にある通り、“他人から見れば不利な道を自分で選んでいるように見える”。しかし、彼女たちは“それぞれの人生のなかのわずかな、どうしようもない選択肢のなかから、必死で最

善を選んでいる”のである。

この本を読んで絶望する人もいれば、救いや勇気を得る人もいるだろう。この本を生徒に読ませた藤田先生はどのような考えで、その子に何を抱かせたかったのか。分かるような気もするが、私にはまだその覚悟が足りていない。生徒と本気で向き合い、心の底から生徒を信頼することができなければ、きっとこの本は渡せない。本を読み終え、先生に追いつくにはまだまだ教師として、人間としての修業が足りないとただただ感じる私であった。



それは、「かわいそう」でも、「たくましい」でもない。この本に登場する女性たちは、それぞれの人生のなかの、わずかな、どうしようもない選択肢のなかから、必死で最善を選んでいる。それは私たち他人にとっては、不利な道を自分で選んでいるようにしか見えないかもしれない。上間陽子は診断しない。ただ話を聞く。今度は、私たちが上間陽子の話を聞く番だ。

岸政彦（社会学者）

沖縄の女性たちが暴力を受け、そこから逃げて、自分の居場所をつくりあげていくまでの記録。

私は卒業間近となったクラスの学級通信でこの本を読んだ感想をありのままに書いた。私の勤務校は男子校である。普段は子供のようにしゃぐ高校3年生も皆、真剣に聞いてくれた。最後に男性である我々は加害者になりうるということ、そして卒業後大切な人や家族ができたなら幸せを与える人になってほしいと伝えた。独身男性しかいない教室で、誰かにとって安心できる居場所であるよう男を磨き続けることを誓い合ったことをいつまでも忘れずにいたい。

「裸足で逃げる」

上間陽子（うえまようこ）

一九七二年、沖縄県生まれ。琉球大学教育学部研究科教授。専攻は教育学、生活指導の観点から主に非行少年少女の問題を研究。一九九〇年代後半から二〇一四年にかけて東京で、以降は沖縄で未成年の少女たちの調査・支援に携わる。共著に『若者と貧困』（明石書店）。本書が初めての単著となる。

過去、最新版の

KWS Newsはこちらから！

